

高橋正子五十句鑑賞

花冠発行所 平成二十三年一月二十八日

執筆者一覧

【春十名】高橋信之・柳原美知子・高橋正子・矢野文彦・藤田裕子・黒谷光子・小西宏・池田加代子・川名ますみ・藤田洋子

【夏九名】柳原美知子・森孝明・高橋信之・黒谷光子・池田加代子・藤田裕子・後藤あゆみ・河野啓一・井上治代

【秋九名】柳原美知子・森孝明・藤田洋子・小西宏・桑本栄太郎・河野啓一・井上治代・小川和子・高橋信之

【新年・冬十五名】川本臥風・小西宏・多田有花・川名ますみ・祝恵子・黒谷光子・宮地祐子・井上治代・藤田洋子・小川和子・山中啓輔・高橋秀之・佃康水・古田敬二・柳原美知子

春

轉りの抜け来る空の半円球

読み手に快い思いを与えてくれるのは、作り手の心が新鮮で、句を楽しんで作っているからであろうと思われれます。句が生き生きとしています。

私たちの俳句は、いわゆる名利の世界とは無縁で、水煙は、出世間の俳句仲間の集まりです。名利の世界を離れてこそ、真実の世界が見えてきます。心は生き生きとして本当の生活を樂しむことが出来るのです。漱石の「則天去私」の心境もこういったものであろうと思います。私たちの俳句の精進は、この心境にいたらんがためのものなのです。私たちの俳句は、内面的なものを求めています。明るくて深いところを求めています。

(高橋信之)

らんまんの一花こぼさぬ花強し

咲き満ちて日に輝き、仄かな香を漂わせている桜。風に吹かれて撓う枝に、優美な花がひとつだに零れ落ちることなく戦いでいる。爛漫の花に秘められた強靱さに驚嘆し、短い花の生命の限りを精一杯輝かせて咲いている、美しくもけなげな桜への愛しさが込み上げてきます。透徹した観察眼と女性ならではの感性の感じられる生命の讃歌に心惹かれます。 (柳原美知子)

春寒し木を打ち人を呼び出せり

春寒の季節、寂びた佇まいの森閑とした禅寺を訪れる。玄閑に着くと魚の形の板が吊るされている。修行僧に食事や起床の時刻を知らせるのに打ち鳴らす魚板の名残りだろうか。家人を呼ぼうと置いてあった木槌で板を叩くと、樹々に反響して、静寂な境内の奥深くから木の音が響いてきます。思いがけない魚板の音に迎えられ旅の妙味や修行僧の生活などが思われます。

(柳原美知子)

花あしびしずけきものに山の路

東山銀閣寺での作。光は明るく空は高いものの、京都の春寒い日のこと。寺苑をめぐる山路にかかると、眼に映るものは低く咲くあしびの花。すれ違う人もたまにはいるが、人のいることを忘れさせる山路。銀閣寺の姿と相俟って、「しずけきもの」とは、こういうものかと実感する。山路からは、竹の秀先越しに京都の霞んだ町並みが見える。

(作者自解)

雛飾り今宵雛と灯を分かつ

お雛様と分け合う灯り。常とは違う夜が更けてゆく。昔ながらのゆらめく灯りであってほしい。

(矢野文彦)

花の塵掃き寄す少女の一心に

さくらの花びらが散って、地上は花びらで一面覆われています。少女は一心にその花びらを掃き寄せています。少女を見つめる優しい眼差しを感じました。又、花の命の美しさ、尊さも感じました。

(藤田裕子)

清洲橋

ケルンの橋青く塗られて春の橋

東京深川の清洲橋は、隅田川にかかる橋で、一九二八年竣工。

きよすばし

当時世界最美の橋と呼ばれたドイツのケルン市にあった大吊り橋をモデルにしているが、その吊り橋は、第二次世界大戦で破壊され、別の橋が再建された。二〇〇〇年四月二十九日に花冠(水煙)創刊二百号記念大会を東京深川の芭蕉記念館で開催したが、花冠同人とその清洲橋の美しい夜景を見た夜が懐かしい。

(高橋信之)

稚き葉の白く開きて灌仏会

正子先生が句に詠まれると、花まつりの甘茶佛がこんなにも清らかで可愛いことに感動いたしました。私の寺は五月八日ですが、先生の御句を唱えながら飾らせていただきます。待ち遠しい気持ちです。

(黒谷光子)

多摩川の奥へと桜咲き連らぬ

川土手の道に沿って桜並木が続いている。太かった川幅は、上るにつれて兩岸を寄せ合わせ、やがて源流へとしずまっていたのである。観察の場所がどこであろうと、桜にはそうした根源へと人の思いを導いていく奥深さが秘められているようである。

(小西 宏)

煽られて花のゆるるは大いなる

ほぼ満開となった桜のひとかたまりが、風にゆれる様子にはボリリューム感がありますね。「大いなる」という言葉のおおらかさが、とても好きです。

(池田加代子)

来るまでを辛夷のひかり見て待てる

待ち時間。ついこの間まで、足もとに萌える色を探していたのが、今は「辛夷のひかり」を見上げていることに気づきます。季節の細やかな動きをとらえる作者は、人ばかりでなく、春の「来るまでを」も、無私の内に「見て」いらっしやるのかもしれない。自然を見ていれば、待ち時間の焦りや退屈とは無縁でしょう。結果を求めて苛立つ心境を、優しく平して下さる一句です。

(川名ますみ)

八十八夜のポプラに雀鳴きあそぶ

松山でのお住まいのポプラ、四季折々の美しい佇まいを私も楽しませていただきました。ポプラの高木の緑のそよぎ、雀の軽やかな囀り、八十八夜ならではの明るく温和な情景が快く伝わってきます。

(藤田洋子)

夏

竹落葉わが胸中を降るごとし

筍が若竹に生長し、古い竹はしきりに落葉している。一片ずつ静かに降りしきる竹落葉の乾いた音と感触が、胸中深くひとつの季節の終わりを告げているようです。惜春の想いとともに、人生のひとつの節目を越えられた感慨が伝わってきます。潔くひとつの季節を逝かせ、新たな季節に向かわれる強さを感じます。自身の内奥の真実を深く見つめられる詩人の魂を御句に見る思いです。

(柳原美知子)

野ばら咲く愛のはじめのそのように

清浄な野山の空気に触れ、野ばらが可憐に咲いている。開いたばかりの真白い花びらが、初夏の光を受けて静かに香り、風に揺れる風情に、愛のはじまりの頃の柔らかく、純粹で、伸びやかな心持ちやきらきらと生命の輝くような刻が想われる。愛

とは生命の輝きの極みであろう。その原初の姿を野ばらに見る。繊細で豊かな女性ならではの感性をもって詠まれた美しい生命の賛歌に、感動を覚えます。

(柳原美知子)

鐘の音のわれを包んで夏空へ

ドイツの古都ヴルツブルクの街並みにそびえる教会から鳴り響く鐘の音。それは初めて訪れた作者を親しく包んで夏空へ立ちのぼっていく。澄んだ音に包まれて作者の心も自由に広がり、そこに在る自分を率直に感じ取っているのである。

(森 孝明)

白ばらの空気を巻いていて崩る

しみじみとしたところがあって、ベテランらしい深みもあります。私の求めていますのは、明るくて深いところのある俳句です。透明感のある俳句です。

(高橋信之)

撒き水の虹を生みつつ檜ぬらす

撒き水に陽があたって七色に耀く一瞬、傍に檜の木があるのでしょうか、葉っぱも濡れて光ります。近頃見られなくなった撒き水になつかしさ、涼しさを感じさせていただきました。

(黒谷光子)

ドイツの旅平成二年夏

ラインのぼる巨船の人の裸かな

夏のライン河を大きな船がのぼっていく動きがおおらかです。日光と風にさらされた裸は、ゲルマンの男でしょうか。船上の開放感は格別なことでしょう。夏のドイツの旅の気持ちよさが、この一句にありのままに投影されていると思います。

(池田加代子)

松林に白百合まばら富士裾野

富士の裾野に広がる松林、緑が生い茂り、空気が澄んでいてとても気持ちよい空間です。地の方に目をやると、白百合がまばらに咲いていて、清楚で気品があり、心が和まされます。広大な光景と白百合の白、とても印象に残りました。(藤田裕子)

葛飾は薔薇咲き風の吹くところ

薔薇の香りが風に乗って吹いてきて、心地よい葛飾でのひとときが想像されます。寅さんの瓢々とした姿なども目に浮かんで来て、自然体で過ごせそうな町の風情を感じます。

(柳原美知子)

階の濡れしに青葉映りたり

階きざはしとは何と美しい言葉でしょうか。どのような階段なのか色々想像してイメージがふくらみます。雨上がりかも知れません。濡れた階に青葉が映っている詩的な光景で、心が潤います。さりげなく詠まれていますのに深みのある美しい句だと感動致しました。

(後藤あゆみ)

明治神宮

新緑の枝差し交わす神の杜

神の杜には瑞々しい新緑が交差し、初夏の風を受けてさわさわとゆらめき、木々の精霊の言葉がきこえるようです。

(井上治代)

横浜動物園

石楠花に深山の風の吹き起こる

石楠花、特に在来種には洋種にない趣があります。どこでも深山幽谷の風情を想像させてくれる石楠花独特の情緒が余すところなく描かれています。

(河野啓一)

わが視線揚羽の青に流さるる

晴れた空から、ふいに揚羽蝶が影を落とし舞い降りる。黒い模様の翅に艶のある青い鱗粉をまとい、ひらひらと花に止まっては、飛び去って行く。自ずとその美しい揚羽の青を追う視線に夏景色のみどりの中の青い流れが美しく、無心の刻へと誘われます。身近な蝶との出会いが優しく美しく表現され、生命の瑞々しさ、尊さが吹き渡る風と共に爽やかに感じられます。

(柳原美知子)

秋

水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ

池畔を吹く風に乗り、翅を光らせて自在に飛ぶ蜻蛉。すいと水面に近づいたかと思うと、空の青さと池の辺のみどりを湛えた水にそつと触れ、薄く透明な翅を広げている。その軽やかで涼しげな水に映った姿を見ていると、心洗われるようです。爽やかな風が胸の奥まで吹きわたります。蜻蛉の一瞬の動きを鮮やかに捉えられ、澄明な詩の世界が広がっています。句のリズムもよく自然と口ずさみたくくなります。水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ

(柳原美知子)

パソコンを消して露散る夜となりぬ

インターネットを通して、俳句の添削指導やデイリー句会、オンライン句会といった様々な句会を、平成8年「水煙」のホームページ開設以来、熱心に指導されており、海外の俳人たちとも交流されている。そんな一日、国内外の俳人たちとの心温まる交流を終え、パソコンを消し、夜のしじまに耳を澄ませます。秋の夜も深まり、庭の草木にも凜々と露の散る音が聞こえるようです。秋の夜の深まりとともに、一日の充実感がひろがってゆきます。平明な言葉の中に、ずしりと重い歴史を感じます。

(柳原美知子)

満月光地上に高きコスモスに

正子さんは空が好きである。その空を光や音を通して眼前に広がる大きな空間として形成してみせるのがうまい。

(森 孝明)

秋海は青より銀に由比ヶ浜

ひと夏の賑いのあと、穏やかに澄んだ青を湛える秋の由比ヶ浜。その海面に日が反射してきらめく銀色の、何と爽涼な広やかさでしょう。数年前、鎌倉吟行に参加させていただいた折の美しい由比ヶ浜を思い起こしました。

(藤田洋子)

ポプラ黄葉雲寄り雲のまた流る

ポプラの黄葉はそれ自体かすかで消え入りそうなところがあ
り、それだけに、空に映って美しい輝きを見せてくれる。その
枝に寄りまた流れゆく秋の雲のさまは、爽やかな冷気をも感じ
させる。

(小西 宏)

呼んでみるかなたの空の雲の秋

良く晴れた秋晴れの高い空には、刷毛雲、ひつじ雲、いわし
雲が次々に現れ刻々と変化して流れて行きます。青空の高い天
空を眺めていますと、爽やかさに思わず「おおい雲よ！」と親
しく呼んで見たくなる心情にとっても共感致します。

(桑本栄太郎)

秋水湧く波紋をそのまま手にすくう

山峡にこんこんと湧きだしている清水。水の輪を大きくその
まま、両手で掬いたくなる素晴らしい秋の水です。きつと冷た
くておいしかったことでしょう。

(河野啓一)

パソコンを消して露散る夜となりぬ

パソコンを消すと、しんしんと夜が深まっていき、静寂な時
が流れていくのを感じます。「露散る夜」という表現がロマンテ
イックだと思いました。

(井上治代)

さやけさの中へ起き出し四肢があり

暑く寝苦しい日がいつの間にか去り、今朝の目覚めの何と心地よいことでしょう。すこやかに起き出し、さわやかな一日のはじまりです。

(小川和子)

遍路路は稲の花咲く道ならむ

「遍路路」の多くは、四国の田園地帯で、「稲の花咲く」風景と、鈴を鳴らし、遍路杖を持つ遍路姿が似合う。四国八十八ヶ所のお遍路は、春に多いので、「遍路」は、春の季語となっているが、夏の季節、秋の季節にも四国路に見る。愛媛の大洲に住んでいた頃は、お遍路が万歳、獅子舞の門付のように、鈴を鳴らし、経を唱えてくれた。玄関先に出て、首につるした頭陀袋^{ずだ}にお米を入れてあげたのも、懐かしく思い出す。

(高橋信之)

新年・冬

水菜洗う長い時間を水流し

こんな句は、地味なようで、実は派手な句と言えます。自分の感動をよく吟味し、工夫して、表現した新しさがあります。

(川本臥風)

手袋に手を入れ五指を広げみる

冬の日到手袋をすればほんのりと温かい。嬉しさに五本の指をそっと広げてみる。指と指が離れ、毛糸の網目が広がってもまだまだ温かい。包まれてあることの喜びを目いっぱい確認してみる少女。

(小西宏)

餅を焼く火の色澄むを損なわず

お餅は日本人にとっては特別な食べものです。お正月を迎えるために用意するのもお餅です。それを焼く火の色、「澄むを損なわず」に厳かさを感じます。食べるということ、それを用意する気持ち、双方に通じる厳かさです。

(多田有花)

波立てば鴨の勇みて泳ぎけり

池や川など穏やかな水面を、ゆっくりと浮きゆく鴨。けれど、風か獲物か、そこに波が起こる時には、鴨も勢い込んで泳ぐのですね。「勇みて泳ぎけり」の強さから、水と鴨が同時に動く、自然が一体となって力を発する瞬間が実感されます。

(川名ますみ)

正月の子どもが五人じゃんけんぼん

長閑なお正月です。子供達の健やかさを思います。見ていた

い景です。

(祝 恵子)

寒林を行けばしんしん胸が充つ

広々とした冬の林を通られたのでしよう。身を切るような寒さの中に も落葉を踏み裸木を見上げて歩けば、来る春の様子も想像され自然の摂理にあたたかい気持ちになられたのだと思います。また厳しい寒さを歩かれ却って満ち足りた気持ちになられたとも想像します。

(黒谷光子)

跳躍の真紅の花のシクラメン

真紅のシクラメンとは、まるで篝火のようでしょうね。そこに躍動感を見てとられた、詠者の心境が重ね合わせられているようです。

(多田有花)

鎌倉・報国寺

竹林の千幹二千幹が冬

冬の竹林の美しさは立ち並ぶ幹の力強さにこそ。冷え冷えと地にあり、凜と空を指す千幹二千幹の影に日本古来の景を感じます。

(宮地祐子)

オーバーの肩の落ちしが身に安し

ゆったりとしたオーバーが暖かく身体を包んでくれます。寒い冬も心はほかほかしてきて安らぎます。

(井上治代)

木蓮の冬芽みどりにみな空へ

木蓮の冬芽は温かそうなふさふさの毛に包まれ少し透けて薄緑の筆の形にも見えませぬ。その冬芽は垂直に皆上を向いて居り、「みな空へ」の措辞から厳しい寒さにも耐えられる力強さを感じると同時に春先には見事な花を咲かせるだろうと期待が膨らみます。

(佃 康水)

鎌倉・宝戒寺

内陣のひがし明るき白障子

内陣とは、本尊を安置する本堂のこととか。そのひがし側には白障子が設えられ、うす暗い本堂に明るさと清々しきをもたらししている様子が窺われるように思います。

(小川和子)

日にありて冬木の幹の白かがやく

燦々と日差しを浴びて、枯れ木の樹皮が一際白く輝いている。すつかりと葉を落としてしまった枯木に、思わぬ美しさを発見した。こういう、つい見落としがちな光景に美しさを見出し、いくことが、俳句には不可欠であるということ、改めて教えられた。自然を深く見つめるということを、肝に銘じたい。

(山中啓輔)

落葉踏み階踏みてわが家の燈

落葉を踏みながら家の前まで帰ってきた。家まで帰ると、足元も落葉から階に変わり、目の前にはわが家の燈がある。ほつと一息をつくことのできる一瞬である。

(高橋秀之)

薪ストーブ静けき熱をわれらに放ち

遠い昔、スキー場に行った時の事を思い出します。薪ストーブの揺らめく炎、時折はぜる音、ほっこりとした静かな熱を放

つストーブを囲み身体を温め、心もほぐれお仲間との楽しい空間と時間を過ごされて居る情景が浮かびます。 (佃 康水)

荒星に富士の山小屋閉づるらむ

星は眺める季節によって印象が変わります。「荒星」は寒さを強調した冬の星の表現。晴れ渡った夜空の冬の星は秋以上の輝きです。想像するに、河口湖で水煙大会が開催されたおり、正子先生をはじめ何人かが、富士山頂で「詩」を読むべく富士登山をされました。その折の富士山の山小屋で眺めた夏の星を真冬の空に見つけ、詠まれたのではないのでしょうか。閉ざされた冬の山小屋から見える満天の冬空も想像されます。(古田敬二)

大年の山河も晴れを賜りし

大年のこの日にあつて、恵まれた晴天が、この上なく清々しく晴れやかに感じられます。明るく輝かしい自然の大らかさに、一年の末日の深い感慨とともに、来たる年への明るい希望もあふれます。(藤田洋子)